

第Ⅱ章 その他

資料紹介 内嶋コレクションに見る上川名貝塚収集土器について

上川名Ⅱ式土器理解のために

I はじめに

土岐山 武

「内嶋コレクション」とは柴田郡柴田町槻木に所在する東禅寺の住職であった内嶋大哲氏が長年に渡り収集した資料の総称である。氏が収集された資料は歴史関係資料の範疇に留まらず、岩石、化石、民芸品、自然遺物等幅広い分野に及び、その収集品の総量は平箱 11 箱の分量となっている。「内嶋コレクション」は後日、氏により「しばたの郷土館」に寄贈され、現在本館に保存されている。そのコレクション中に槻木貝塚群の一つである「上川名貝塚」収集土器がまとまって存在している。本稿ではその収集土器の概要を紹介する。

さて、柴田郡柴田町上川名に所在する本貝塚は古くから全国的に広く知られた貝塚であり、明治、大正、昭和にかけて坪井正五郎をはじめとする多くの著名な学者が現地を訪れている。1947 年（昭和 22）には加藤孝氏による発掘調査も行われている。このように「上川名貝塚」は多くの研究者により注視された貝塚であることを踏まえ、最初に「上川名貝塚」についての研究成果や概要について記述し、「内嶋コレクション」の紹介を行いたい。

Ⅱ 上川名貝塚調査研究のあゆみ

調査年・主体者	1896 年（明治 29）9 月 若林勝邦により踏査が行われる
内 容	記録として上川名貝塚が紹介されている
参考文献	若林勝邦「陸前磐城両地方二三の遺跡」『東京人類学会雑誌』第 102 号と『日本石器時代地名表』
調査年・主体者	1904 年（明治 37）10 月 佐藤伝蔵により踏査が行われる
参考文献	佐藤伝蔵「蔵王火山付近の石器時代の遺跡」『東京人類学会雑誌』第 20 巻第 223 号
	1905 年（明治 38）頃 貝殻が肥料として採取されたことが『柴田郡史』に記載されている
調査年・主体者	1908 年（明治 41）4 月 3 日 坪井正五郎が高橋健自らと踏査を行う
調査場所	柴田郡槻木村字上河原鹿島神社近傍
見聞録の記載内容原文	「広く開いた水田に面する丘。貝はギッシリ詰まり、場所によっては層の厚さが 2 間あった。以前は 2 反歩もあったが開拓のため今は残り少なくなっていた。発掘を試みるも、ザアザアと崩れ落ちるアサリ貝の間から、アワビ貝、獣骨、少量の土器片、石槍 1 個、凹石 1 個を検出するのみ。鹿島神社の裏手にも貝があると聞いてその所も試掘したが同様に獲物は乏しかった。」
成 果	遺物の採集という面では成果を見ることはできなかった
備 考	採集した貝類、土器片、部分人骨等は東京大学理学部人類学科に保管されている
内容記載文献	坪井正五郎 1908 「陸前名取郡地方における見聞」『東京人類学会雑誌』第 2 巻第 267 号 6 月 20 日
年 代	1925 年（大正 14） 柴田郡誌にもその存在が取り上げられる
記載内容原文	「槻木町字上川名、鹿島神社の鳥居前に有名な貝塚がある。この露出している面積は八反歩、深さ十尺余あり明治 38、39 年頃開墾して肥料に焼いた事があるが、明治 39 年故帝国大学教授理学博士坪井正五郎、現皇室博物館歴史課長文学博士高橋健自が岐阜県立中学教諭時代にこの上川名貝塚の実査研究を試みられたことがあるが、当時石器、及び獣骨等の発見があり、坪井博士はこれ食唇人コロボックルの常食生活せる貝塚遺跡であると、講演されたことがある。」
内容記載文献	柴田郡教育委員会 1925 「一有史以前原史時代の柴田郡」『柴田郡誌』 P.14
報告者	1946 年（昭和 21） 安田善二（槻木町入間野小学校長）により貝塚の現状が明らかにされた
現状報告内容	安田善二が貝塚破壊が甚だしいと小野 力（宮城県工業高等学校教諭）に報告した。小野 力は現地で遺物を採集し加藤 孝（東北学院大学教授）に報告した
調査年・主体者	1947 年（昭和 22） 加藤 孝（東北学院大学教授）が小野 力等と発掘調査を実施する
調査内容	現地で出土遺物の採集を行う
成 果	出土遺物が縄文時代前期のものであるということが分かった。小野 力によって縄文土器編年の研究上極めて重要な資料と認識された
内容記載文献	柴田町町史編さん委員会 1983 『柴田町史通史編Ⅰ』
	1949 年（昭和 24） 加藤 孝により継続的な調査が実施される
論文発表者	1951 年（昭和 26） 加藤 孝による研究成果が発表される
成 果	二形式に分類できた。下層土器（槻木第二式並びに素山貝塚上層土器と併行）：破片総数 454 点 上層土器：破片総数 2292 点
内容記載文献	加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』

論文発表者	1978 年 (昭和 53) 齋藤良治
成 果	槻木貝塚群が形成された縄文時代早期～前期初頭にかけては、海進の現象が全国に見られ、気候も温暖であったことを報告した
内容記載文献	齋藤良治 1978「槻木貝塚群とその自然環境」『柴田町郷土研究会報第 11 号』
論文発表者	1998 年 (平成 10) 青木 敬 桐生直彦
記載内容原文	「人面・土偶装飾付土器は 1994 年 7 月末現在 293 遺跡 443 例が認められるが、前期の事例は宮城県柴田町上川名貝塚の 1 例 (前期初頭) に留まっている。」
成 果	
内容記載文献	青木 敬 桐生直彦 1998 「縄文時代前期の人面装飾付土器」『東京考古 16』
調査年・主体者	2004 年 (平成 16) 宮城県教育庁文化財保護課
調査内容	確認調査 丘陵を調査対象とする 貝層及び遺構の有無の確認
成 果	水田の耕作面での貝殻の散布を確認した。用水路や水田側溝の断面で貝層の露出を観察する。西側貝層は予想より広がることが確認された。上川名Ⅱ式、大木 9 式土器を検出した
内容記載文献	宮城県教育庁文化財保護課 2004 『川上名貝塚調査報告書』
2005 年時点で渡辺 誠により人面装飾付土器の出土例が 750 例紹介されている。	

Ⅲ 上川名貝塚の概要

1 遺跡の立地

《地 形》 柴田町の中央付近を東西方向に白石川が流れている。その北側には奥羽山系に連なる高館丘陵が派生している。この丘陵の先端部は前面に広がる阿武隈川の後背低湿地帯に樹枝状に張り出している。

上川名貝塚をはじめとする金谷、中居、深町、館前、松崎貝塚からなる「槻木貝塚群」は丘陵先端部に位置している。

《標 高》 加藤 孝は現地調査時に上川名貝塚の測量を実施し、貝塚は標高 10 ～ 15 m の地点を占めていることを報告している。

《所在地》 宮城県柴田郡柴田町上川名字神廻り戸

《面 積》 鹿島神社南方に突出した舌状台地の東斜面または西斜面に発達した約 7,000㎡。

《土地の現状・所有者》 加藤 孝による発掘調査当時は畑地で、大沼千三氏の所有地であった。

《槻木貝塚群とは》

柴田町には多くの遺跡が存在している。柴田町史には縄文時代から中世までの遺跡が 96 ケ所掲載されている。縄文時代の遺跡だけを見ても 40 ケ所確認されている (柴田町教育委員会 1989 『柴田町史通史編Ⅰ』)。その大部分が町北西部に展開する丘陵部や丘陵から延びた台地の先端部に位置している。丘陵部には標高 290 m の愛宕山や標高 245 m の猪倉山などが存在するが、その周辺の比較的標高の高い場所にも遺跡が存在している。このように町内には高密度で縄文時代の遺跡が分布しており、「縄文時代の遺跡の宝庫といっても過言ではない」(同上 原文のまま掲載)と言わしめるほど多数の縄文遺跡が存在しているのである。

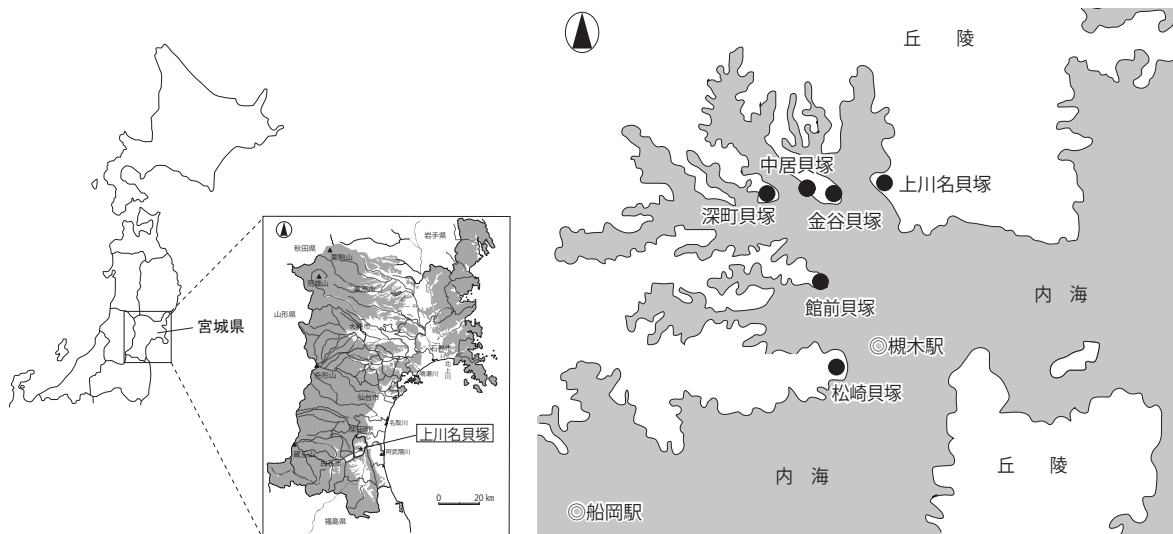
時期も縄文早期末から晩期までの全時期にわたっている。中でも、特質すべきは槻木町西部の樹枝状に延びた台地上の先端部に松崎、上川名、金谷、中居、深町、館前貝塚が存在していることである。これらが槻木貝塚群と呼ばれている遺跡である。槻木貝塚群の時期について示してみると次の様になる。

番号	貝塚名 (標高 m は約)	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
1	松崎貝塚 (13 m)	槻木Ⅰ,Ⅱ				
2	上川名貝塚 (10 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名 大木 1,4	大木 7,8,10	南境	大洞 BC C1
3	金谷貝塚 (10 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名 大木 4	大木 7,8		大洞 C1 C2
4	中居貝塚 (8 ～ 15 m)	槻木Ⅱ	上川名 大木 1,2,3,4,5	大木 8	南境	
5	深町貝塚 (6 ～ 20 m)		大木 1,4,6	大木 7a-b, 8a-b, 9,10	南境	
6	館前貝塚 (7 ～ 10 m)		上川名大木 1,2,3,4,5,6	大木 7, 8b, 9,10	南境	大洞 C1 C2

(柴田町町史編さん委員会 1983 「槻木貝塚群出土遺物一覧表」『柴田町史通史編Ⅰ』と東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』を参考に作成)

槻木貝塚群の標高に着目してみると時期による標高の違いが見られる。それだけで論ずることはできないが、これらは時期により海面の高さに変化が見られたことを示すと推定される。柴田町史にも「縄文時代早期の終わり頃は、海進により、槻木の沖積平野は一帯が海面と化していた」と記述されており、最も海進が進んだ縄文時代早期末頃は海水が丘陵のひだ深く入り込み、貝塚全面には内湾化した海が広がっていたと考えられる。その後、河川等による沖積作用と海水面の低下などにより、入江は遠浅となり海岸線が後退し湖沼化、湿地化そして陸地化が長い年月をかけて進んだものと思われる。

2 上川名貝塚の位置



槻木貝塚群が形成されたころの海岸線
(齋藤良治「槻木貝塚群とその自然環境」より引用)

3 上川名貝塚の自然環境について

上川名貝塚からハイガイが出土している。「ハイガイは内海の泥底に生息し、その生息域は本州南部以南、すなわち、紀伊半島以南とされている。本州北部に現在は生息していない。このことより、本貝塚が形成された縄文時代早期末から前期初頭は、現在よりも温暖であったことが伺える（齋藤良治 1978「槻木貝塚群とその自然環境」『柴田町郷土研究会報第11号』）。とある。氏は当時の海岸線を想定しているが（上図参照）、上川名貝塚は内海を望む丘陵部に位置していたものと推定され、縄文時代早期から前期初頭にかけて海水が陸地に深く進入していた海進期があったことが分かる。また、シジミなどが豊富に生息していたことから、半鹹（かん）水の泥底でもあった。

上川名貝塚は前期初頭を最後にして放棄されている。これについて加藤 孝は「海岸線の後退に伴ってこの付近の地理的条件が変わり魚介が獲れなくなったため、住民がこの地を見捨て魚介に富む新しい海岸地方に移住したためであろう（加藤 孝 1951「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』）。と述べている。齋藤良治も「縄文時代前期中葉頃から気候が寒冷化の傾向をたどり、海退期にはいり、白石川と阿武隈川が合流して流れ、自然堤防を形成し、これによって出口をふさがれ一大湖沼になり、丘陵間を流れる河川の流入により湖沼が埋没し低湿地帯と変化していったとされている（齋藤良治 1978 同上）。と述べており、海岸線が大きく変化していったことが伺える。

※ ハイガイ：波の静かな内湾の泥の干潟に住む。先史時代には東京湾に多産した。三河湾以西の泥深い浅海に多い

「世界大百科事典 平凡社 広辞苑」

Ⅳ 上川名貝塚の出土遺物

1 自然遺物

加藤 孝は論文(加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』)で自然遺物、人工遺物について次の様に記述している。

- (1) 貝類 貝塚を構成している貝類は表土下 1.6 ～ 2 m の中に含まれており、アカニシ、ウミナ、カキ、ハイガイ、ハマグリ、バイ、マテガイ、オキシジミなどである。
- (2) 獣骨 獣骨は破片共に 200 片を得た。イヌ、イノシシ、シカ、タヌキ、その他小動物骨片が含まれる。魚骨も 20 数片検出されている(以下省略)

2 人工遺物

- (1) 石 器 《 a 打製石器類》 石槍、筥状打製石器、有柄縦型石匙、無柄二等辺三角型石鏃等がある。
《 b 粗製石器類》 所謂礫器製品が多く、他に凹石等が出土している。
《 c 磨製石器類》 特に多いのは部分磨製石器並びに四面を磨いた石器類。破片であるが花崗岩製の環状石斧を蜆貝層下から得た。
- (2) 装身具 《 a 石製品》 蜆貝層より石製品の首飾り(?) 耳環(?) 各 1 点を得た。石製ではあるが、あたかも古墳時代出土の金冠状を呈している。
《 b 貝 輪》 3 点の貝輪を蜆貝層中より得た。内 2 点はアルカ属の貝を磨いて作成せられ、他は真珠質の貝から出来ている。
《 c 骨格器》 8 点得た。内 4 点は鹿角を縦割して作った針である。(以下省略)

(3) 土 器

出土した土器は調査整理の結果から見て、2 形式に分類することができたとされている。

淡水産蜆貝層から出土した「上層土器」と鹹水産蛤貝層またはその下位の黒土層中から出土した「下層土器」とである。

(4) 人面装飾付土器

上層土器中に「人面装飾付土器」が見られた。

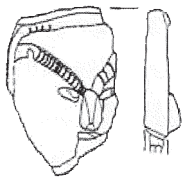
加藤 孝は特徴について「眉上弓が極度につり上がり眉上弓及び鼻部共に隆帯で表現せられ、半截竹管で隆帯上を刺突し、竹管で目を円形に表現し、眉上弓、鼻部、眼部に酸化鉄化粧をしている」と記述している。鼻の形は棒状で鼻筋がずっと通って伸びている。口の存在については不明。目に丹塗(にぬ)り朱の痕跡がみられる。地文は竹管文(押し引き文?)である。

人面が付けられている位置が口縁部直下、外面であることより渡辺 誠の分類の「Ⅱ類 A 類」に分類されるものと思われる。「人面装飾付土器」については渡辺 誠のすぐれた研究があり、2005 年時点で 750 例紹介されている。その中でも前期の人面付装飾土器は私が知るかぎりでは本遺跡出土資料を含めて 5 例だけである。



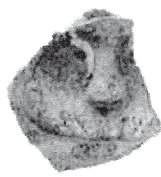
図版 1

宮城県柴田町川上名貝塚出土
上川名Ⅱ式(前期初頭)



図版 2

神奈川県下大磯峯遺跡出土
十三菩提式(前期末)



図版 3

長野県大田苅遺跡出土
十三菩提式(前期末)



図版 4

千葉県八千代市赤作遺跡出土
十三菩提式(前期末)



図版 5

東京都多摩市和田西遺跡出土
諸磯 b 式(前期後葉)

図版1の上川名貝塚出土の人面装飾付土器は眉や鼻を隆線で、目をくぼみで表現している。吊り上がった眉と縦位に鼻がY字状に交わり表現されている。眉毛、目、鼻の周囲に丹塗りがみられる。この土器について渡辺 誠は「人面装飾付土器の重要な特徴を最初から備えていることに注目される(注1)。」、また、藤沼邦彦(弘前大学教授)は「人面装飾付土器の最古の例であり、目鼻の表現があるのは土偶よりも先行している(注2)。」と述べている。

図版2は口縁部の破片で、眉部は細い粘土紐が貼付され連続爪形文が施文されている。口縁部の縁にも同様の施文が見られる。目、口は裏面まで貫通してくり抜かれている。鼻部は粘土を貼り付け、眉や鼻はリアルな作りとなっている(注3)。

図版3については詳細について知ることは出来ていない。

図版4は報告書(注4)に「平口縁の一部が山形にやや突出しておりその部分に人面装飾が付いている。上向きの平坦な顔面は、上下端を沈線で区切っている。上端は突起の形状に沿ってほぼ水平に、下端は突起の付け根に沿って弧状に引かれており、突起の形状と相まってやや下膨れである。顔面には穿孔による両眼と口の表現がある。両眼の目尻は若干切れ上がり、口元は左上に上がり気味である。また、黒く変色している範囲は隆起線が剥落したものであると思われる。この範囲と付随する複数の沈線から、眉と鼻梁を連結した意匠が添付されていたと推察される。口縁部には顔面突起を囲むように杵状の区画文が形成されていたと思われ、顔面突起下の剥落部にはこの区画文の陵線を集約した橋状等の突起が付された可能性がある。」と記述されている。

図版5は波状口縁付近に円盤状添付がなされており、そこに棒状の施文具による刺突で目と口が、粘土貼付による鼻が表現されている(注5)。

以上、5例を紹介したが、ここで特筆すべきことは図版1以外は前期末または後葉の時期であり、図版1だけが前期初頭となっていることである。

そして、この時期より古い時期の人面装飾付土器の出土例は報告されておらず、現在、図版1の宮城県柴田町上川名貝塚出土の人面装飾付土器は日本最古で唯一の人面装飾付土器となっていることが分かる。

上川名貝塚の調査にも関わり、本貝塚の研究者である加藤 孝は人面の描き方に着目し「眉上弓の末端が上がる程古い形式とされていることを裏書きする編年学上極めて貴重な資料である(注6)。」と発見当時からその重要性について言及している。

この人面装飾付土器について渡辺 誠は氏の論文の中で「時期的にもっとも古い例は宮城県上川名貝塚例で、前期初頭の上川名Ⅱ式期に属す。前期例は他にみられず、突出している。人面装飾付土器の最古の位置を占めている。そのうえこの眉毛、鼻および目の周囲には丹塗りがみられ、人面装飾付土器の重要な特徴を最初から備えていることに注目される(注1)。」と述べている。

人面または獣面が装着されている土器研究は100年以上前から八幡一郎、鳥居龍蔵等により研究がなされている。人面装飾付土器の発見数は年々増加し750例程になっているが、それでもなお70数年前(1950年)に発見された上川名貝塚の人面装飾付土器は日本最古、日本唯一の座を譲っていないのである。

(注1) 吉本洋子・渡辺 誠 2005 『人面・土偶装飾付土器の基礎的研究』

(注2) 藤沼邦彦 1997 『縄文の土偶 歴史発掘3』 講談社

(注3) かながわ考古学財団 1997 「神奈川県泰野市下大槻峯遺跡」 『かながわ考古学財団調査報告24』

(注4) 千葉県教育委員会 2016 「八千代市赤作遺跡」 『一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』

(注5) 青木 敬 桐生直彦 1998 「縄文時代前期の人面装飾付土器」 『東京考古16』

(注6) 加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」 『宮城学院研究論文集』

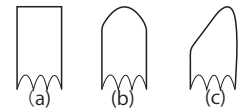
内嶋コレクションから

【上川名貝塚収集土器】

内嶋コレクション土器での上川名貝塚収集土器には口縁部、体部、底部破片とがある。殆どが大破片である。本稿では全ての口縁部 45 点と小型土器 1 点、実測可能な底部 4 点について検証し提示した。土器の器形、文様等については以下の様な視点から分類・記述を行った。器形は、Ⅰ類：口縁部が直線的に立ち上がるもの、Ⅱ類：口縁部が外反するもの、Ⅲ類：頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるものとし、口縁部は形状により A 類：平坦口縁、B 類：波状口縁とに分類した。口唇部には加飾が施されていないものと加飾として圧痕文等が施されているものに分類した。加飾されたものについては、その圧痕等の形状により施文器具先端の形状、太さ、施文方向、押圧によるものか刺突かなどについて観察を行った。口唇部断面形は (a)：上面が平坦なもの、(b)：丸みを帯びるもの、(c)：先端が細くなり丸みを帯びるものとに分類した。(第1図)

文様については、地文だけのもの、口縁部・頸部等に文様帯をもつものが見られる。

文様帯については主に形状、施文器具、施文方向等について記述した。地文は斜行縄文、羽状縄文、還付端末文、斜行撚糸文とに分類した。胎土については全ての土器に繊維、石英等の混入が認められた。口縁部破片以外では、小型土器 1 点、底部の形状が分かる実測可能な底部破片 4 点について記述を行った。



第1図

(1) 第Ⅰ類土器 (図版 1：1～9 写真図版 1：1～9)

口縁部に屈曲をもちず直線的に立ち上がるものである。すべて A 類：平縁である。口唇部に加飾がないもの (1~3,5,6)、棒状器具等により加飾されているもの (4,7,8) 半截竹筒等の工具により施文されているもの (9) とがある。口唇部断面は (a)：平坦なもの (1,4)、(b)：丸みを帯びるもの (3,7,8,9)、(c)：先端細くなり丸みを帯びるもの (2,5,6) とがある。口縁部に文様帯をもつもの (2~6,9) とないもの (1,7,8) とがある。2 は 5～6 状の平行沈線文間に竹管工具等による連続刺突文が横位に施文されている。3, 5 は半截竹管状の工具等による連続刺突文が、4, 6 は丸みを帯びた棒状工具等による連続押圧文が、4 は粗雑な平行沈線文が 7～8 状横位に、9 は曲線状の沈線文がジグザグ状に施文されている。頸部に文様帯が見られるもの (1,3,4,9) がある。1 は隆帯上に押圧文が、4 は連続した押圧状の刺突文が、3, 9 には隆帯が見られず、3 は爪形状の刺突文のみが、9 は爪形状の刺突文のみが上下から交互に連続して施文されている。地文は斜行縄文のもの (4,6,7)、羽状縄文のもの (3,5,8)、結束羽状縄施文のもの (1,9)、還付端末状のもの (2) とが見られる。1 は口縁径が直径約 40 cm の大型の深鉢土器の破片である。

(2) 第Ⅱ類土器 (図版 2・写真図版 2：10～22 図版 3・写真図版 3：23～39 図版 4・写真図版 4：40、41)

口縁部が外反するものである。口縁は B 類：波状口縁が (28,29,40) 3 点のみで他はすべて A 類：平坦口縁である。口唇部形態は加飾がないものが 60% 以上であるが、棒状器具等により加飾されているもの (26,32~38,40,41) も見られる。口唇部断面は (a)：平坦なものが約 30%、(b)：丸みを帯びるものが約 50%、(c)：先端が細くなり丸みを帯びるものが約 20% であった。口縁部に文様帯をもつもの (26,39,40) がある。26、40 は棒状器具等による圧痕文が施文されている。39 は竹管器具等による横位刺突文と一条の横位沈線文が施文されている。頸部に文様帯が見られるもの (27,32,35,36,40) がある。35、40 は竹管器具等による刺突が上下から、36 は上方だけから交互に施文されており、32 は頸部のくびれ部に棒状器具等を下部から刺突し隆帯状に見えるような横一条の文様が作り出されている。27 は押し引き状の刺突文が無文帯上に横位に施文されている。地文は斜行縄文が約 25%、羽状縄文が約 22%、結束羽状縄施文が約 45%、斜行撚糸文約 2%、羽状縄文+付加縄文が 1% 弱だった。

(3) 第Ⅲ類土器 (図版 4：42～45 写真図版 4：42～45)

頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるものである。すべて A 類：平坦口縁である。口唇部に加飾がないもの (42~44)、棒状器具等により加飾されているもの (45) とがある。口唇部

断面は(a):平坦なもの(44)、(b):丸みを帯びるもの(42,43,45)とがある。口縁部に文様帯が見られるもの(44)があり、口縁部上端に比較的幅広の爪形状の文様が横位に連続して2条施文されている。頸部に文様帯をもつものはない。地文は羽状縄文(42)、斜行撚糸文(43)、結束羽状縄文(44,45)である。

小型土器 (図版4:46 写真図版4:46)

46は完形の小型土器である。器形は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。口縁径は約11.8cm、底径は約5cmである。口唇部断面形は(b):丸みを帯びている。無文である。体部の一部に指の跡か指で撫でたような痕跡が見られる。表面は凹凸がありゴツゴツしている。

底部土器 (図版4:47～50 写真図版4:47～50)

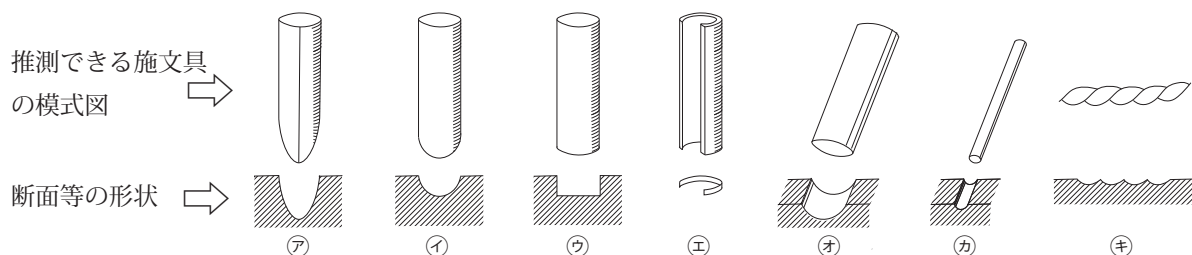
47～50は底部土器の破片である。47は底部が完全に残っているが、体部は高さ2.5cm程しか残存していない。体部には撚糸文が施文され、底部にも見られる。底部は平底であるが僅かに窪んでおり、凹凸が見られる。

48は底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながら外傾する。底部は3分の2が残存しており、推定底径は約4cmである。体部は高さ3.5cm程しか残存していないが、口縁径に対して底径比が非常に小さい深鉢土器と思われる。49は底部から口縁部にかけて外傾する。底部は3分の1程残存しており、推定底径は約4cmである。体部は高さ2cm程しか残存しておらず、口縁径は不明であるが、体部の傾きの角度から推定するとこの土器も口縁径に対して底径比が非常に小さい深鉢土器と思われる。体部の底部付近に押し引き状の文様が横位に数条施文されており、底部にも円形、直線状の押し引き状の文様が施文されている。50は底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながら外傾する。底部は4分の1程度しか残存していない。推定底径は約6.5cmである。体部は高さ2cm程しか残存しておらず、口縁径は不明である。体部の底部付近にはRLの押圧縄文が施文されており、底部には数条のRLの押圧縄文が渦巻き状に施文されている。

収集土器の編年的位置づけ

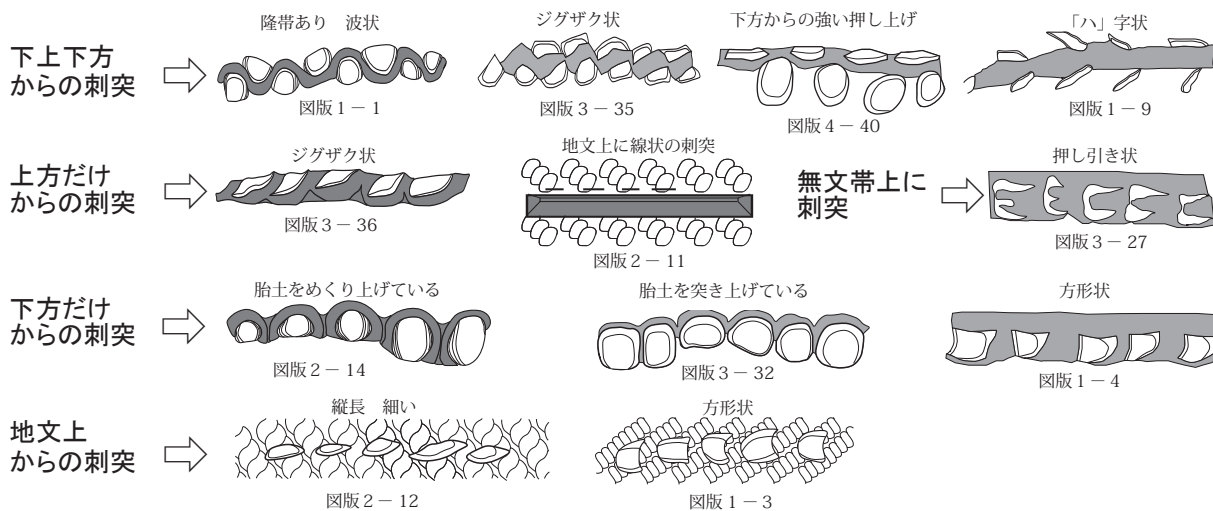
今回紹介した土器は収集資料であり点数も少ないため、その特質について正確を期した考察は難しいものと思われる。本稿では収集土器からどのような傾向を伺い知ることができるのかについて論じてみることにしたい。地文については圧倒的に多く見られたのが羽状縄文であった。その中でも結束された羽状縄文が比較的多く見られた。多く見られた順に並べてみると、結束羽状縄文(18点)、羽状縄文(12点)、斜行縄文(11点)、斜行撚糸文(2点)、還付末端文(1点)羽状縄文に付加縄文が見られるもの(1点)となる。撚糸文は非常に少なかった。口縁部の形状は平坦口縁と波状口縁とがあるが、平坦口縁が殆どで波状口縁のものは3点しか見られなかった。器形は外反するものが大多数(46点中32点)だった。直立するものは9点、内反するものは僅か5点だった。胴部の器形については僅かに膨らみのあるものが多く見られた。

文様については地文だけのもの(46点中18点)が半数近くあり、文様が施文されている土器は28点であった。文様は棒状または竹管状工具等を使用し、口唇部、口縁部、頸部に集中して施文されており、口縁部破片を見る限りでは胴部に施文されているものはなかった。文様は器面を横位に全周するように連続した圧痕または刺突が施文されているものが殆どであった。文様で特筆すべきは、口唇部が加飾されている土器(46点中17点)が多く見られることである。粘土等で型を取り施文具を復元すると、第2図のような棒状または半截竹管状の器具等を用いていることが推測された。



第2図

㊦先端がそろばんを横から見たような形状や、㊧丸みを帯びたもの、㊨平らなものなどの棒状器具等や、㊩半截竹管状の器具等を垂直または斜め方向から押し付けたり、㊪太さが1cm、または㊫0.3cm程の棒状工具の腹部を斜めに押し付けたりして施文しているものと思われる。なお、㊬縄文原体をそのまま押し付けたものも1点見られた。口縁部文様もほぼ同じ器具等、方法で施文されているものと思われる。口縁部文様で特徴的なのは口唇部上端の一部にまで施文されているものが多く見られることである。中にはそのまま口縁部を超えて口唇部まで施文されているもの（図版1－8）も見られる。頸部においても同様の傾向が見られる。頸部文様をもつものは11点ある。隆帯が巡らされているものとないものとが見られる。いずれも棒状または竹管状器具等を垂直、斜め方向から押し付けたりしている。上下から、上方、下方だけから、地文上、無文帯上に刺突文が見られる。以下の第3図は頸部文様帯を模式的に表したものである。



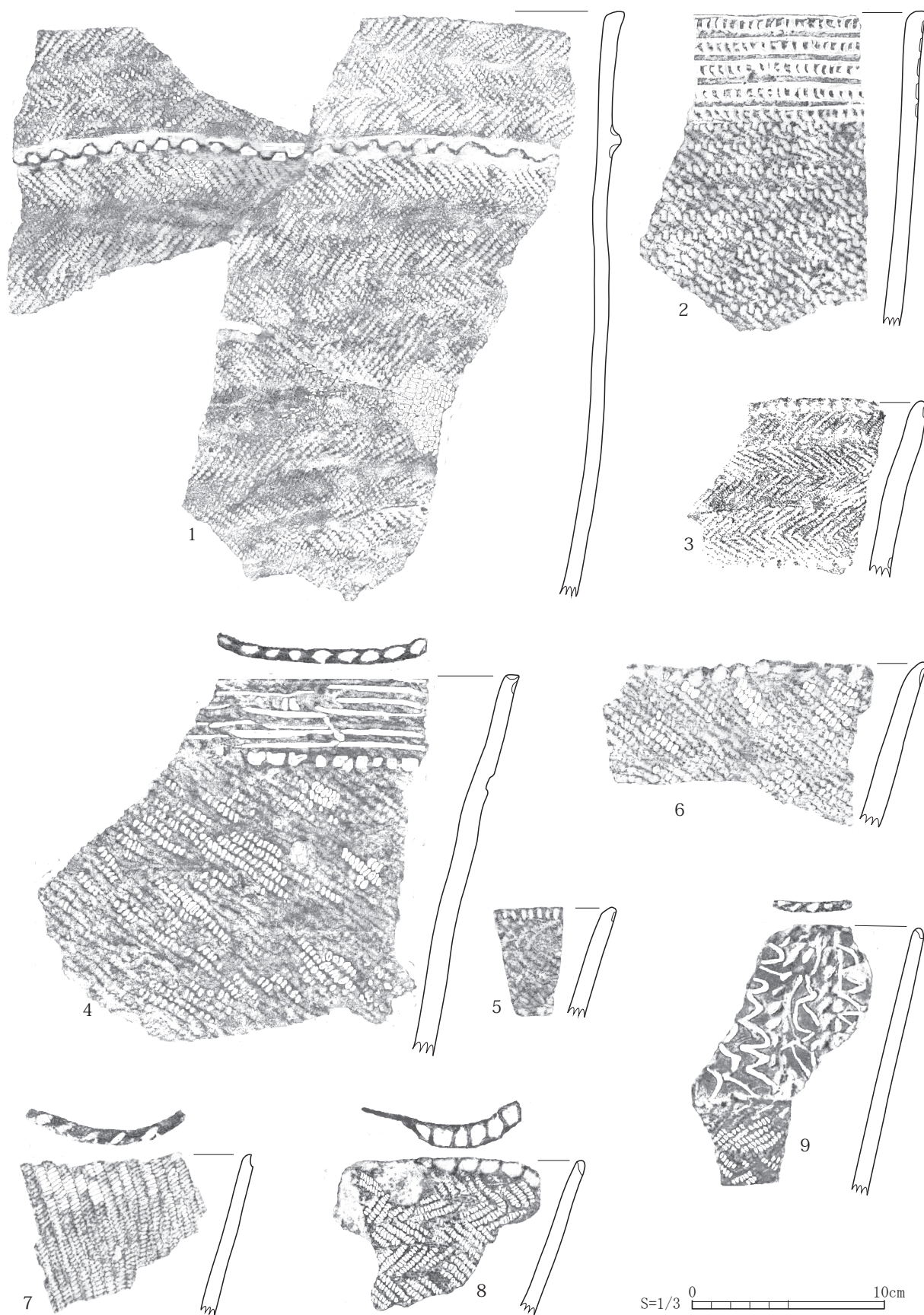
第3図

頸部文様で主体となっているのは刺突である。隆帯貼付のものだけでなく、隆帯の貼付がなくても、器具を差し込み、押し付け、めくり上げたりすることによって一見隆帯状に見える区画帯を作り出そうとする意匠が見られるものもある。底部については底径が6.5cm程のものも見られたが、底径が4cm程の比較的小さいものも多く見られる。底面には渦巻き状の押圧縄文、押し引き状の刺突などが施されていること、底径が口径に比較してかなり小さいという特徴的な傾向が見られる。器厚は薄いもので0.6cm、厚いものでは1.2cmのものが見られるが、多くは0.6～1cmである。全ての土器に植物性繊維を含んでいる。胎土中に多少の違いはあるが石英粒等を混入しているものが殆どであった。小型土器については明確ではないが、以上の様な特質をもつ土器は、加藤 孝により上川名Ⅱ式として位置づけられている（加藤 孝 1951）。また、角田市「土浮貝塚」の報告書でも同様の特質を有する土器を上川名Ⅱ式と位置づけている。これらのことにより、本収集土器の多くは編年的に上川名Ⅱ式に位置づけられるものと思われる。なお、上川名貝塚のコレクションは土器のみで、石器、骨角器等の収集品は見られなかった。

引用・参考文献

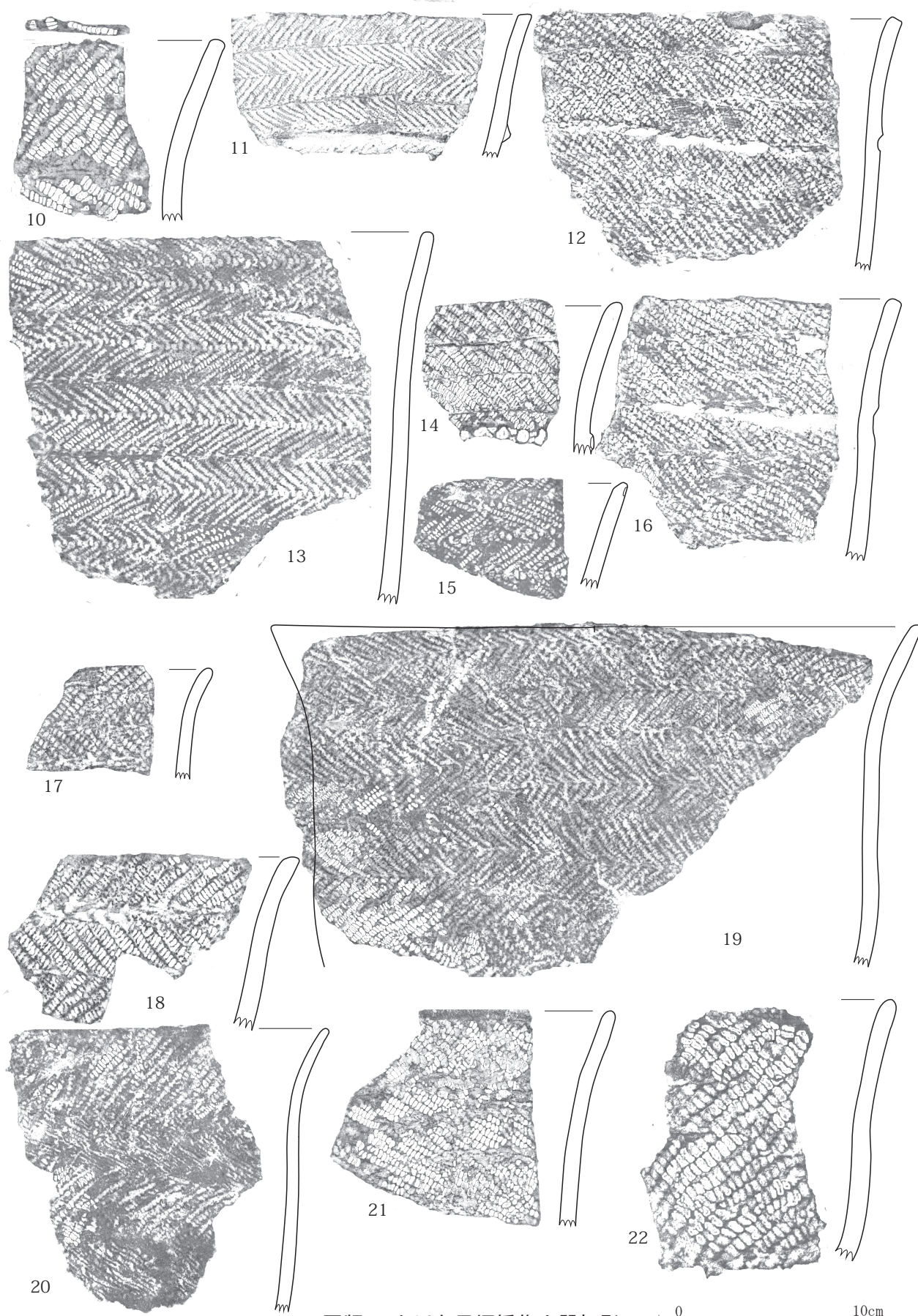
- 青木 敬 桐生 直彦 1998 「縄文時代前期の人面装飾付土器」『東京考古 16』
 角田市教育委員会 1994 「土浮貝塚」『平成5年度調査概報』
 加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究 ―東北地方縄文式文化の編年学的研究―」『宮城学院研究論文集Ⅰ別刷』
 柴田郡教育委員会 1925 『柴田郡誌』
 柴田町史編さん委員会編 1989 『柴田町史通史編Ⅰ』
 坪井正五郎 1908 「陸前名取郡地方における見聞」『東京人類学会雑誌』第2巻第267号6月20日
 吉本洋子・渡辺 誠 2005 『人面・土偶装飾付土器の基礎的研究』（上川名貝塚出土人面装飾付土器の写真掲載されている）
 かながわ考古学財団 1997 「神奈川県秦野市下大槻遺跡」『かながわ考古学財団調査報告書 24』

第 I 類土器

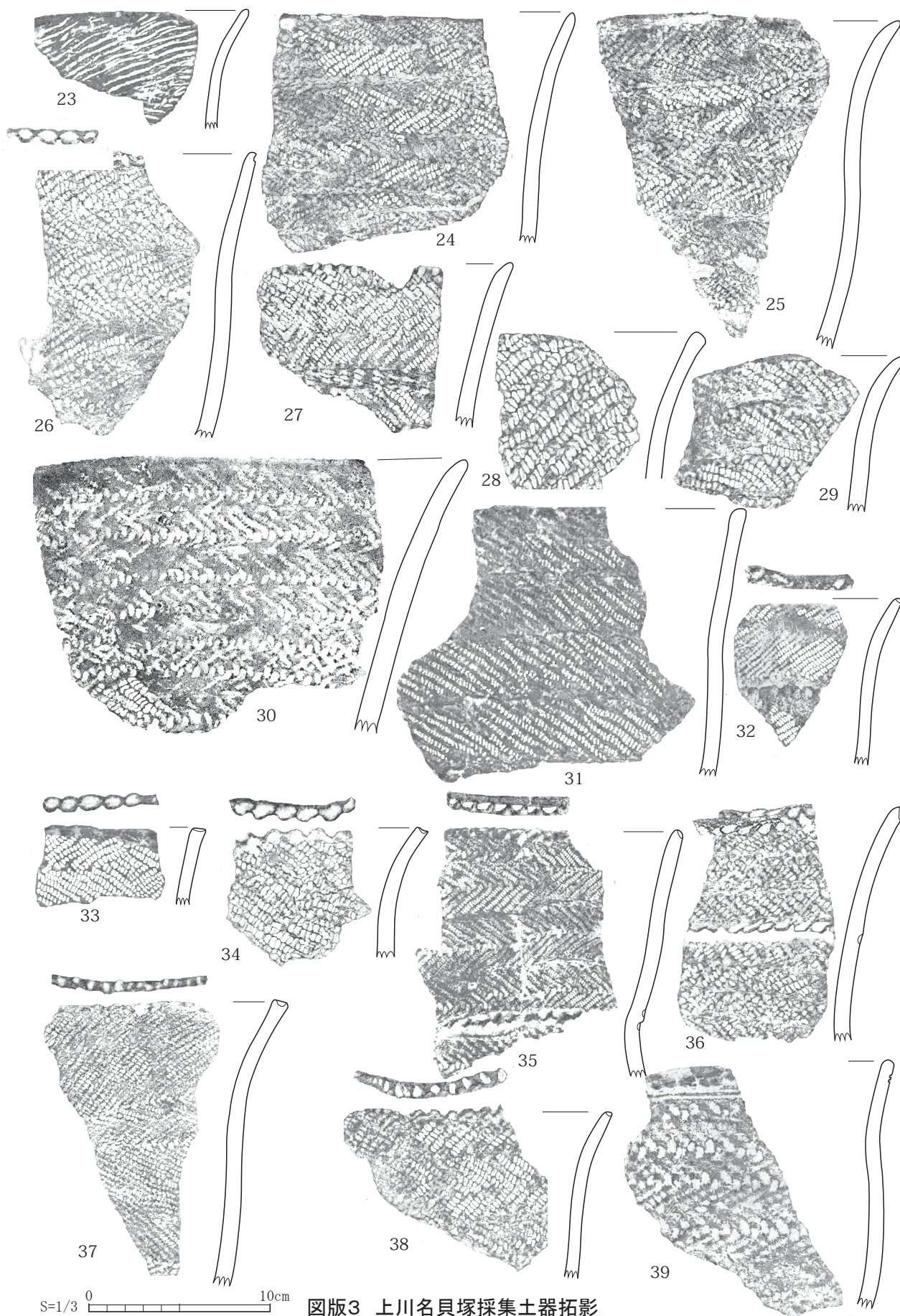


図版1 上川名貝塚採集土器拓影

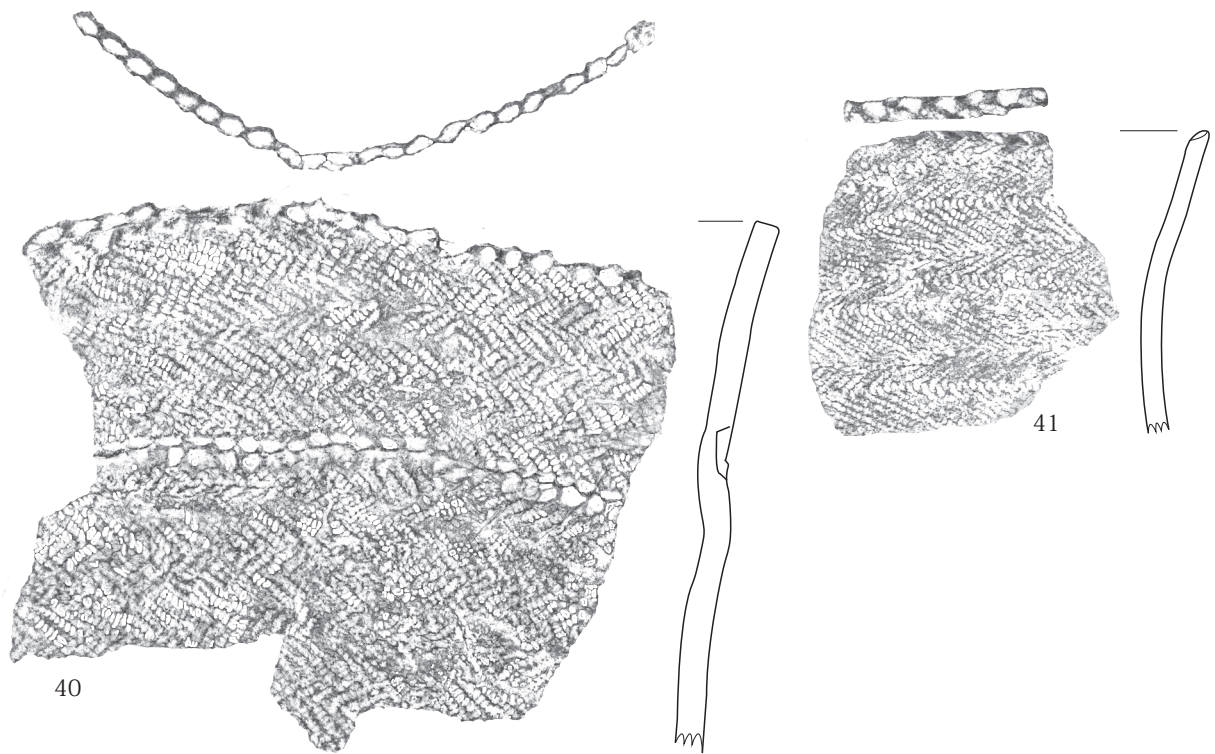
第Ⅱ類土器



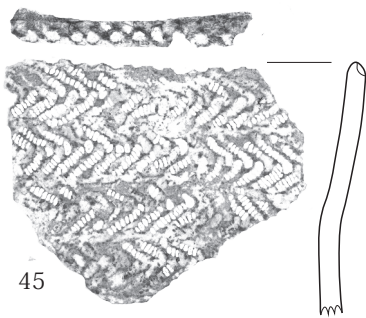
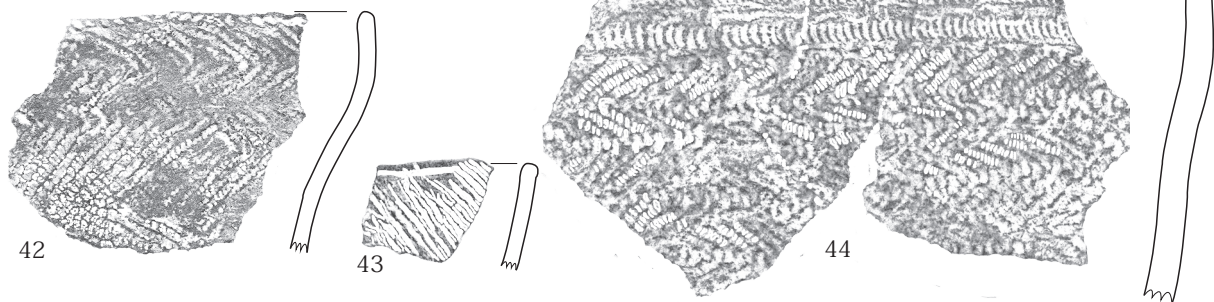
図版2 上川名貝塚採集土器拓影 S=1/3 0 10cm



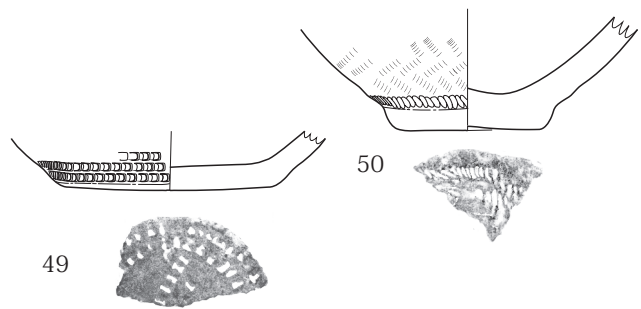
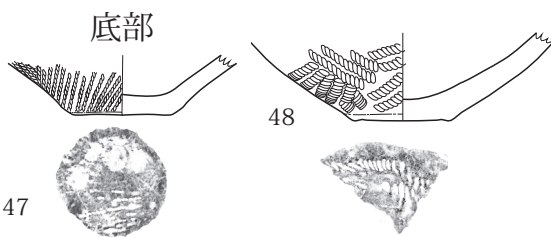
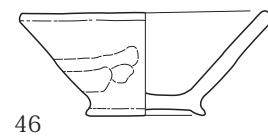
図版3 上川名貝塚採集土器拓影



第Ⅲ類土器



小型土器



S=1/3 0 10cm

図版4 上川名貝塚採集土器拓影及び実測図

内嶋コレクション上川名貝塚収集土器属性表

No	器形	() は口唇部断面形状 加飾の有無	口縁部・頸部文様帯	地 文 () は片方原体幅	胎土	器厚
1	I-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし 頸部に粘土紐貼付 上下方から刺突	結束羽状縄文 (21mm)	小石等を殆ど含まない	8mm
2	I-A	(c) 加飾なし	口縁部に 5~6 条の平行沈線文+沈線間 に竹管による連続刺突文	環付端末文	小石等を僅かに含む	9mm
3	I-A	(b) 加飾なし	口縁部上端に半截竹管等による刺突文 頸部縄文上に刺突	羽状縄文 (17mm)	小石等を殆ど含まない	11mm
4	I-A	(a) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部に圧痕文+粗雑な平行沈線文が 7~8 条横位に施文 頸部に下方から のみの押圧状の刺突	LR 斜行縄文	小石等を殆ど含まない	10mm
5	I-A	(c) 加飾なし	口縁部上端に刺突文が横位に一行施文	羽状縄文 (15mm)	小石等をやや多めに含む	9mm
6	I-A	(c) 加飾なし	口縁部上端に圧痕文が横位に一行施文	LR 斜行縄文	小石等を殆ど含まない	12mm
7	I-A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	LR 斜行縄文	小石等を含む	8mm
8	I-A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (16mm)	小石等を含む	9mm
9	I-A	(b) 半截竹管等による 刺突状	口縁部に曲線状の沈線文 頸部に上下方から「ハ」字状刺突	結束羽状縄文 (23mm)	小石等を殆ど含まない	9mm
10	I-A	(b) 縄文原体圧痕	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (40mm)	小石等を殆ど含まない	11mm
11	II-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし 頸部に線状の刺突	羽状縄文 (15mm)	小石等を含む	8mm
12	II-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし 頸部に地文上から 横位の刺突	LR 斜行縄文 (21~31mm)	大き目の小石等を含む	10mm
13	II-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (20mm)	小石等を含む	10mm
14	II-A	(b) 加飾なし	頸部に下方からのみの刺突	LR 斜行状縄文 (20mm)	大粒の小石等を含む	8mm
15	II-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (20mm)	小石等を含む	9mm
16	II-A	(a) 加飾なし	頸部に幅広の窪みが横位に見られる	LR 斜行縄文 (20mm)	大き目の小石等を含む	10mm
17	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (22mm)	小石等を多く含む	8mm
18	II-A	(a) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (32mm)	大粒の小石等を含む	10mm
19	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (25mm)	小石等を含む	9mm
20	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状+付加縄文 (33mm)	小石等を含む	7mm
21	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (24mm)	小石等を僅かに含む	9mm
22	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	RL 斜行縄文	小石等を僅かに含む	10mm
23	II-A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	斜行撚糸文	小石等を僅かに含む	7mm
24	II-A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (12mm)	小石等をあまり含まない	9mm
25	II-A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (20mm)	小石等を多く含む	9mm
26	II-A	(c) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部上端に棒状工具等による圧痕文 が横位に一条施文	結束羽状縄文 (23mm)	小石等を僅かに含む	10mm
27	II-A	(c) 加飾なし	頸部の無文帯上に押し引き状の刺突	羽状縄文 (20mm)	小石等をやや多く含む	10mm
28	II-B	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	RL 斜行縄文	小石等を含む	10mm
29	II-B	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文	小石等を僅かに含む	10mm
30	II-A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (14mm)	小石等をあまり多く含ま ない	12mm
31	II-A	(c) 加飾なし	口縁部文様帯なし	LR 斜行縄文 (34mm)	小石等を含む	9mm
32	II-A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	頸部が段差状に大きくくびれる 下方のみから刺突	RL 斜行縄文	小石等を比較的大く含む	8mm
33	II-A	(a) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (20mm)	小石等を含む	8mm
34	II-A	(a) 棒状器具等による 圧痕文	文様帯なし口縁部	LR 斜行状縄文	小石等をあまり含まない	10mm
35	II-A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	頸部の上下方から刺突 ジグザク状	結束羽状縄文 (15mm)	小石等を多く含む	10mm

No	器形	() は口唇部断面形状 加飾の有無	口縁部・頸部文様帯	地 文 () は片方原体幅	胎土	器厚
36	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	頸部上方からのみの刺突	結束羽状縄文 (18mm)	小石等を僅かに含む	10mm
37	Ⅱ－A	(a) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (13mm)	大粒の石等を僅かに含む	10mm
38	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (19mm)	大粒の石等を比較的大く 含む	8mm
39	Ⅱ－A	(b) 加飾なし	横位沈線文による幅の狭い文様帯が 施文	結束羽状縄文 (27mm)	小石等を殆ど含まない	9mm
40	Ⅱ－B	(a) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部上端の一部に棒状器具等によ る圧痕文 頸部に上下方から圧痕状 の刺突	結束羽状縄文 (14mm)	小石等を含む	11mm
41	Ⅱ－A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (18mm)	小石等を含む	8mm
42	Ⅲ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	羽状縄文 (20mm)	小石等を含む	7mm
43	Ⅲ－A	(b) 加飾なし	口縁部文様帯なし	斜行撚糸文	小石等を殆ど含まない	7mm
44	Ⅲ－A	(a) 加飾なし	口縁部に幅広の爪形状の文様が横位 に二条連続施文	結束羽状縄文 (20mm)	小石等を含む	11mm
45	Ⅲ－A	(b) 棒状器具等による 圧痕文	口縁部文様帯なし	結束羽状縄文 (22mm)	小石等を含む	9mm
46	I－A	(b) 加飾なし	文様帯なし ユビナデのような痕跡 が見られる	無文	小石等をわずかに含む	6mm

No	底 径	底部厚	文様・特徴等	地 文	残存部器厚
47	41mm	8mm	残存高が約 25mm の底部破片。体部には撚糸文が施文されており、 底面まで施文されている。底部には凹凸が見られるがほぼ円形の 平底である。	撚糸文	7mm
48	(40mm)	9mm	底部から口縁部にかけて僅かに湾曲しながら外傾する。残存器高 約 35mm の底部破片。	方向をかえた RL の斜行縄文	10mm
49	40mm	8mm	底部から口縁部にかけて外傾する。残存器高約 20mm の底部破片。 体部には底部付近まで押し引き状の文様が横位に数条施文。底部 にも円形、直線状の押し引き状の文様が施文。	不明	9mm
50	(65mm)	10mm	底部から口縁部にかけて外傾する。残存器高約 20mm の底部破片。 底部付近に RL の押圧縄文が施文。底部には数条の RL の押圧縄 文が渦巻き状に施文。	羽状縄文	11mm

【口縁部形態】 I 類：口縁部が直線的に立ち上がるもの
Ⅱ類：口縁部が外反するもの
Ⅲ類：頸部に屈曲をもち、口縁部が内湾またはわずかに内湾ぎみに立ち上がるもの

【器形】 A 類：平坦口縁 B 類：波状口縁

【口唇部断面形】 (a) 平坦 (b) 丸みを帯びるもの (c) 先端が細くなり丸みを帯びるもの

写真図版

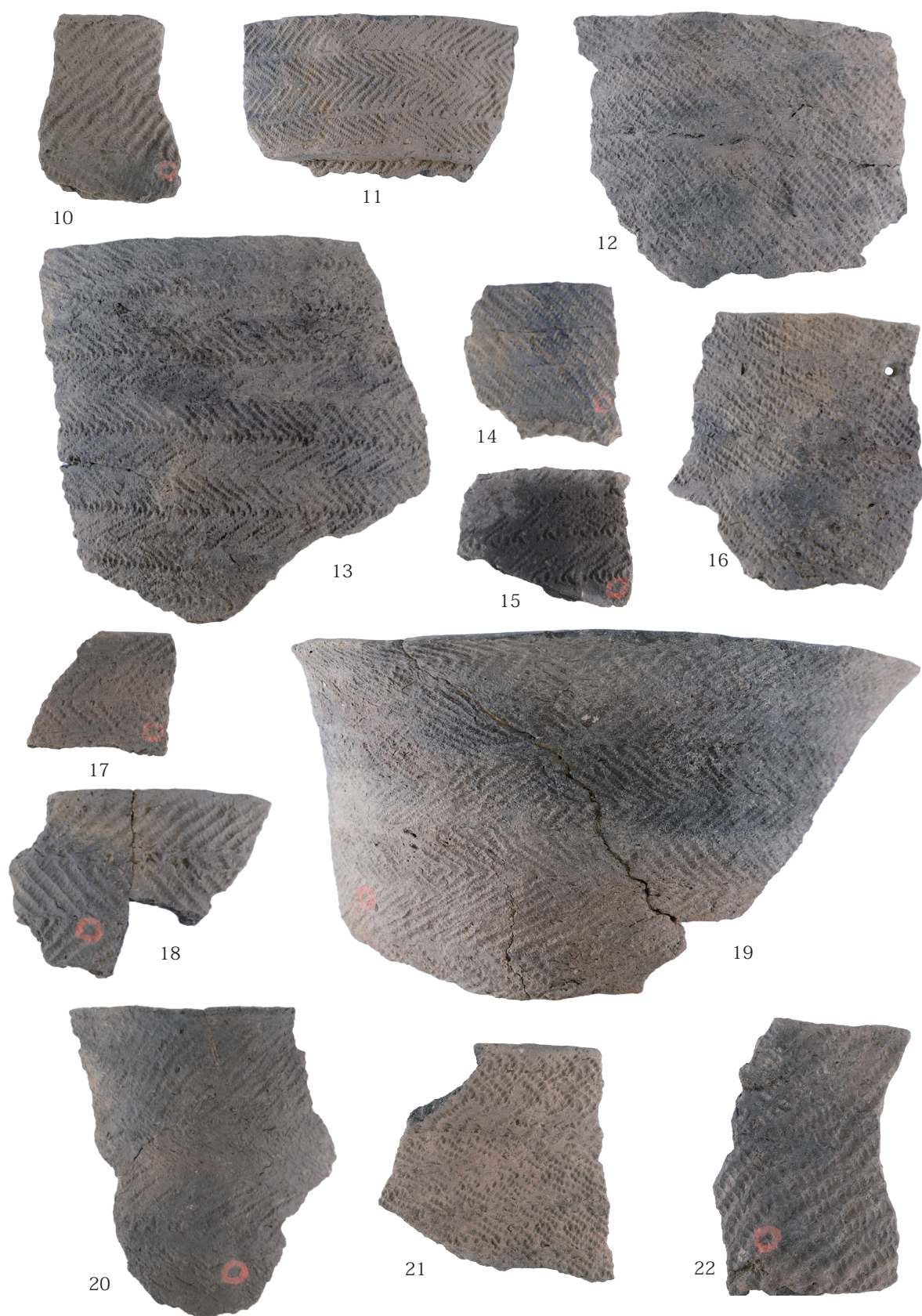
第Ⅰ類土器



縮尺 = 1 / 3

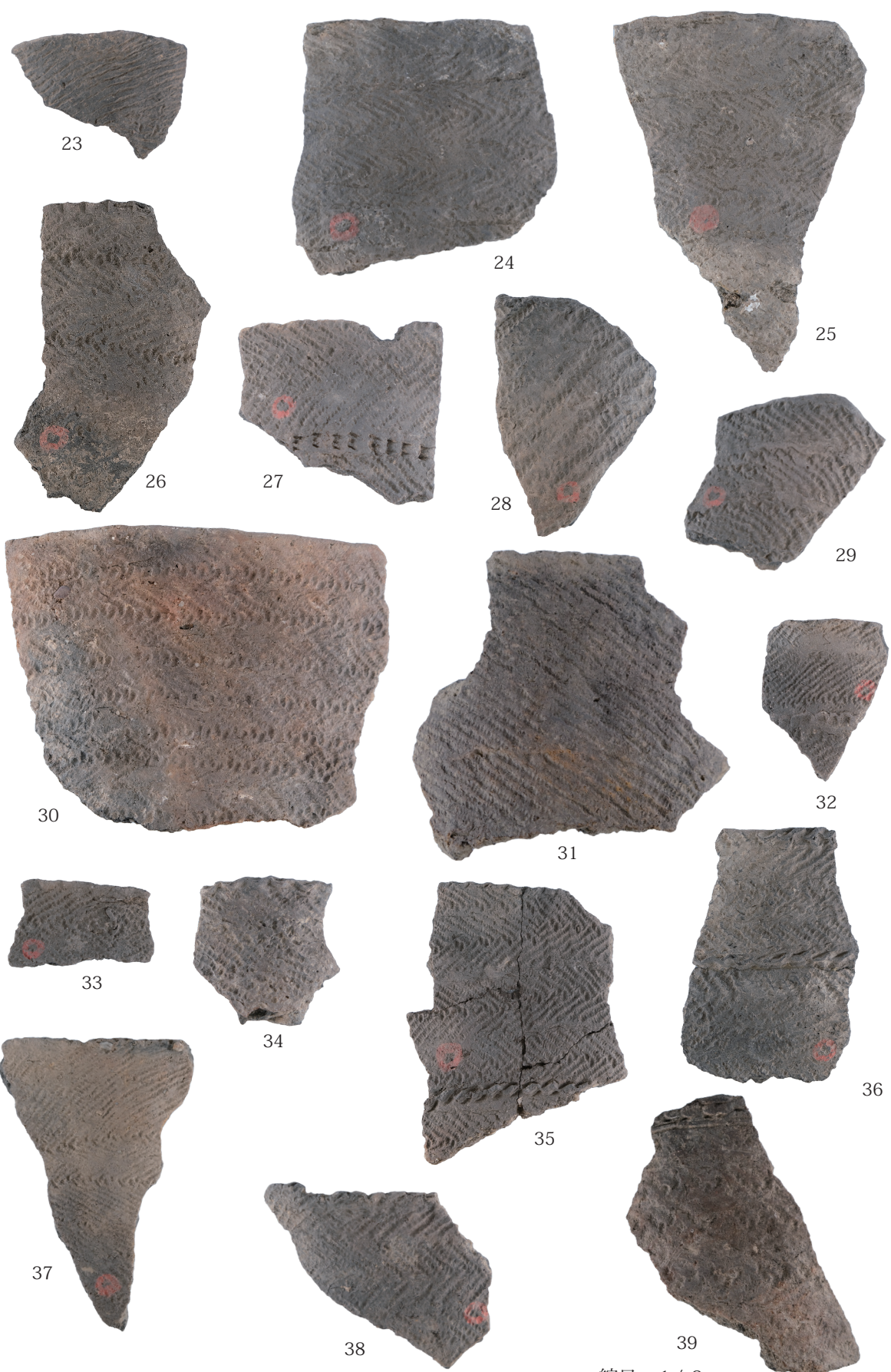
写真図版1

第Ⅱ類土器



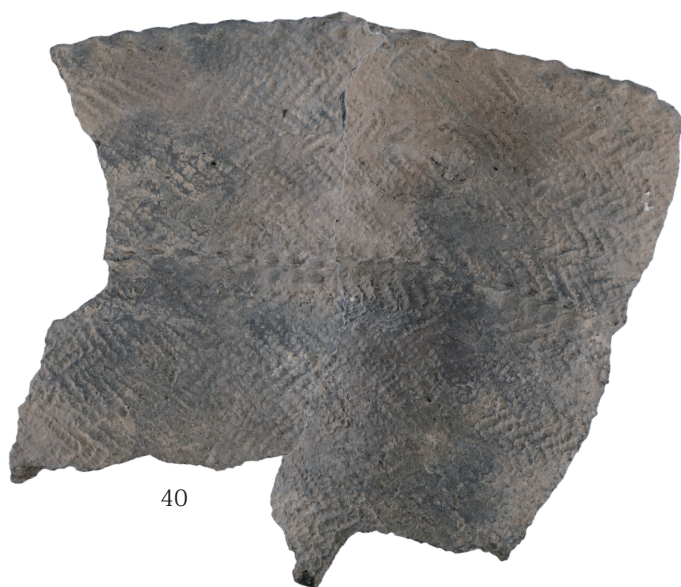
縮尺 = 1 / 3

写真図版2



写真図版3

縮尺 = 1 / 3



第Ⅲ類土器



小型土器



底部



縮尺 = 1 / 3